

組見本 (60%)

本文は大きめの活字で読みやすく、空海の原文は太字で表記した

本文

6 「後夜仏法僧鳥を聞く」(「性華」巻第十より)

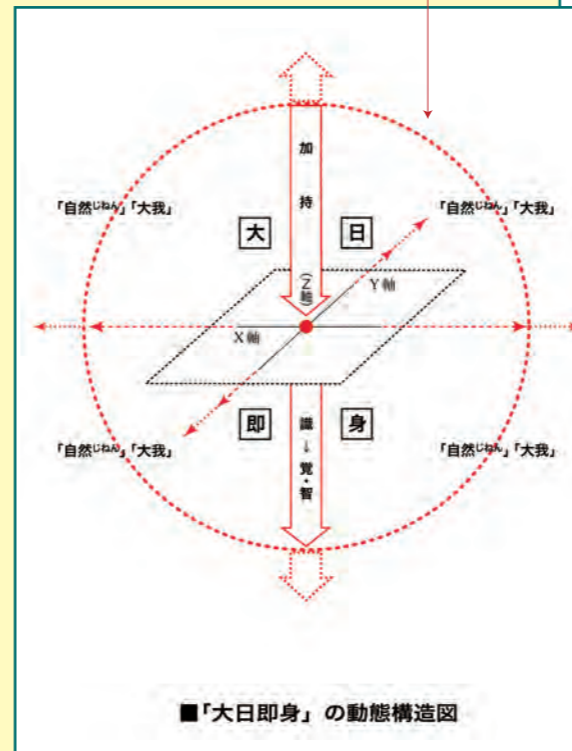
——鳥声有り人心有り 声心雲水俱に了たり

夜半から早朝にかけての時間を「後夜」という。まだ明けやらぬ午前四時頃であろうか。ゆつくりとした地球の自転が、太陽光の影をその光の中に明け渡そうとするとき、時間が「夜」から「朝」へ移る微妙な「と」である。

後夜聞仏法僧鳥 後夜仏法僧鳥を聞く
閑林独坐草堂曉 閑林に独り坐す草堂の曉
三宝之声聞一鳥 三宝の声一鳥に聞こゆ
一鳥有声人心有 一鳥声有り人心有り
声心雲水俱了了 声心雲水俱に了たり

この詩が書かれた時期も場所も不明であるが、山中でひとり後夜の勤行をしたときの印象である。「仏法僧」と鳴く鳥の声に触発されて一気にならぬ「自然」に直入してゆく。「心」とは「自心」であり、すでに「自心の仏」であろう。「雲水」とは「自然」そのもの。それらが透明な世界の中で溶けあい、「了」としてこの身にひとつになっている。清しい「自然」を「観」であり、このまま「即身成仏」の身体感覚といえるのではないだろうか。

要所に図版を入れ本書の骨格を示した



■「大日即身」の動態構造図

□ 著者略歴 □

猪股清郎 (いのまた きよら)

昭和十五年 東京生まれ

昭和三十七年 慶應義塾大学経済学部卒業、昭和三十九年同商学部卒業
専攻・マルクス経済学(経済史)

昭和三十九年 ㈱東芝入社。平成六年〜平成一〇年東芝エレベータエンジニアリング(株)取締役社長。平成二二年退職(六〇歳)

平成一九年 大正大学大学院博士課程修了。同三月学位取得(博士(仏教学))

現在 大正大学総合佛教学研究員、仏教における生(いのち)研究会代表、日本密教学会会員、日本山岳会会員

索引

▼あ	204, 207, 214, 216, 221, 231, 269
阿彌陀 233, 234, 329, 415, 416	ニホルキ一 30-33, 35-37, 49, 59, 67, 68,
阿字(阿彌字、阿字) 165, 167-169, 190,	73, 80, 81, 92, 94, 98, 104, 107, 109, 114,
197-199, 204, 207, 214, 227, 249, 256,	116, 118, 120-122, 125, 139, 140, 149,
326, 414, 415	150, 152, 157-162, 164, 175, 177, 178,
アミズミ 43, 77, 78, 142, 146, 148, 160,	188, 214-216, 221, 224, 264, 266, 267,
268, 270, 271, 274	275, 284, 330, 332, 336, 345, 346, 354,
阿彌陀浄土 69	355, 357, 362, 365, 383, 387, 390-392,
阿彌陀仏 60, 63-69, 75, 114	401, 410, 411, 423, 424, 431-433, 435,
阿 32, 43, 79, 80, 132, 133, 145-148, 268,	439, 440, 443, 444, 447, 452, 453, 456,
269, 274, 282, 286-289, 305, 310, 326-	460, 462, 466
330, 333-336, 340, 349, 351, 378, 380,	円融力 163, 180, 214, 425, 466
402, 403, 413, 414, 450, 452-454, 456,	円融の実義(円融之正義) 210, 211
459	
生(いのち) 191(いのち) 59, 224	▼か
生(いのち)観(いのちの観) 61, 225	河原 190, 197, 198, 204, 207, 214
岩 59, 62, 65, 66, 78, 192, 317, 407	阿字(阿彌字) 165, 168, 190, 199
因不可得 199, 215	我定 30, 113, 162, 165-167, 169, 170, 181,
行(ぎょう) 197, 198, 204, 207, 214	186, 195-197, 203, 215, 221, 447, 452,
任字(任字) 198, 199, 204-207	453
円なる「自然」 29, 30, 32-34, 37, 38,	此(こゝ) 165, 167, 169, 201, 204, 207,
49, 58, 69, 84, 86, 98, 100, 115, 117, 122,	217, 219, 401, 440, 445, 455, 462, 463
131, 140, 149, 150, 152-154, 159, 223,	電了 162, 169, 197, 200, 201, 203, 207,
263, 266, 313, 336, 344, 353, 354, 387,	214, 216, 221
447, 451, 461	加持 30, 41, 72, 162, 164, 175-178, 182,
海 54, 62, 63, 65, 66, 82, 102, 103, 123,	183, 185-188, 194-197, 199-203, 207,
143, 144, 239, 240, 245, 250, 273, 285,	215, 216, 217, 219-221, 223, 246, 247,
342, 362-364, 377, 380-382, 459, 460	253, 294, 416, 442, 445, 447, 462, 463,
畔(はた) 197-199, 202, 204, 207	466
畔字(阿彌字、阿彌字) 162, 169, 197-	加持力(加持力) 166, 167, 170, 188,
(188)	

索引は「事項」のほか、「人名」「書名」「地名・寺名」に加え、「空海のことば」を本書の掲載順に挙げ、併せて原文も表記した

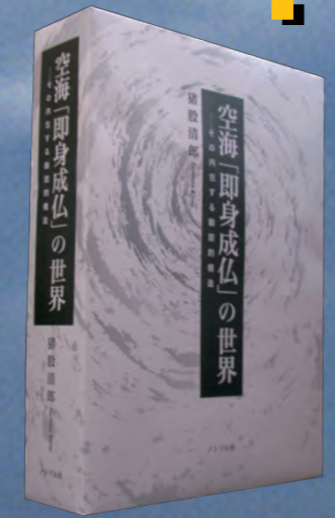
空海研究に新視点!

猪股清郎 Inomata Kiyoo

空海「即身成仏」の世界

—その内包する動態的構造

岳人としての五十余年の体験を縦軸に
三教指帰・性霊集等の詩文類、即・声・畔等の理論書
更には空海が実際の法要等で講演した開題類等を横軸として
空海の成仏論と、その思想が内包する動態的な構造を考察



A5判・上製・クロス装・貼箱入
総頁 584 定価 17,850 円 (税込)
ISBN978-4-903470-50-4

♣ご注文・お問合せは下記へお願いします

図書出版 **ノンブル社** 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-8-22-2F
電話 03-3203-3357 FAX 03-3203-2156

ノンブル社

猪股清郎氏は、すでに社会で一つの仕事を終え、ある出会いから仏教研究にかかわりを持つことになった篤学の士である。私は大正大学での講義において猪股氏を知ることになった。以来、私が大学を退職するまでの講義に連続して参加する過程で、弘法大師空海の成仏論に強い興味と共感から、大正大学の規定にしたがい課程博士の論文をまとめ、提出して博士の許可を得ることになったのである。

猪股氏の弘法大師空海の成仏論には、「動態的な構造が内包されている」ということがキーワードとなつている。その詳細は本書を読んでいただくとして、猪股氏は学生時代から深くかかわつてきた岳人としての体験と、それに裏うちされた人間観・世界観が嗅覚となつて、空海の成仏論に大きく啓発され、「動態的構造を内包している」という沸騰点にいたつた、ということができよう。

仏教学というものが有していた研究対象や、その研究方法に新しい波が巻き起こっている現在、一見して実に強い文学的な色彩の汪溢する問題意識を底流としてあまれた本書は、仏教学の、特に空海研究の門戸を大きく開くことになった一歩であるといふことができるであろう。私の好きな空海の一句に、

澗水一杯朝に命を支え

山霞一咽夕に神を谷う

(朝には谷川の水を一杯飲んで生命をささえ、夕には山の霞を一飲みしてたましいをやしなう)

とあるように、自然児的な沙門空海のご生涯には、躍動する自然との一体感が、その底流にあるといふことは、まごうことなき事実として認めざるをえないと考えるものである。

執筆ノート・自註

高山の夕暮れ、はるかな西の地平に陽が沈んで、頂上の岩の上で夕陽を浴びていた僕からその最後の光がフツと消えた。蒼茫たる大気があたりを包んで、深い谷間から沢の音がわき上がってきた。そのとき、足もとにあつたひとつの小石に、僕の全存在がすうっと引き込まれたような気がした。同時に、周囲何百キロメートルの山や谷や空や地

平の「全空間」とひとつになるのを感じた。

ある日突然、小さな仏像との出会いがわたしを空海に惹きつけた。五十年にわたる日本の「山」とのつきあいの中で、それは「からだ」の奥底に蓄積した「自然」のエキスが眼に見えぬ粒子として自身の中に融け込んだ「大気観」ともいえるものであった。空海にもこのわたしたちにも、そして生きとし生けるものすべてに共通する「自生的

エネルギー」としてとらえた。

本書ではそれをからだの内なる「自然じねん」といふ言葉に集約して底流におき、さらに、空海という「即身」観に共通するひろびろとした言葉「大我」といふ言葉に集約させた。その過程を動態的立体的な「構図」として表した上で、最後にそれを、空海の「大日即身の動態構図」にまとめた。

出会い……

序論

本書の目的と特徴／「動態的構造」とはなにか／人の内なる「自然じねん」について／二つの視点と共通のキーワード——「自然じねん」と「即身」、そして「大我」観／論述の構成と流れ／先行研究について

本論

第1章 人の内なる「自然じねん」から「大我」観・大生命観へのひろがり

- 山中での大我観と日本人の自然観、『莊子』の世界観
- 一、登山家の場合——自然(じぜん)の中での厳しい行動を通じての大我観・大生命観
- 二、山岳修行者「播隆」の場合——高山の頂きにて阿弥陀仏を来迎を迎える大我観・大生命観
- 三、修験行者の場合——神仏・自然との行動的・一体感を通じての大我観・大生命観
- 四、日本人の自然観の特色
- 五、『莊子』の世界観・自然観と中国的大生命観へのひろがり

第2章 空海における「自然じねん」観の形成とその動態的構造

- 『三教指帰』『性霊集』より
- 一、〈自然〉のエネルギーを充填する、若き日の「山林修行者」空海——『三教指帰』より
- 二、空海における「自然じねん」観の形成とその動態的構造・構図——『性霊集』より
- 「自然じねん」の構図

第3章 空海における「即身」観の動態的構造——『即・声・吽』三部書より

- 一、『即身成仏義』より——『六大三密加持』、そして「即身」について
- 二、『声字実相義』より——『声字響き』、そして「法身是実相」について
- 三、『吽字義』より——『如来加持力』、そして「我則大日・大我」について
- 「即身」の構図

第4章 空海における「大我」即「毘盧遮那」

- 『吽字義』『開題』類、『性霊集』等における「大我」が意味するもの
- 一、『大日経』における「大我」の使用例
- 二、空海撰述書における「大我」表現の具体例と、その内容・背景等について
- 三、『大我』即「毘盧遮那」——人に寄り添った「大我」観から「大日即身」への導き

第5章 空海における「自然じねん」観の展開と「自心法界・大日即身」観へのひろがり——『性霊集』等より

- 一、『自然(じぜん)』から「自然じねん」へ——『自然(じぜん)』との入我我入
- 二、『自然じねん』の境で「即身」に法身・法界を觀ず——『心境冥会』して「方法自心本一体」と覺る
- 三、『自然(じぜん)』の境で「即身」に法身・法界を觀ず——『心境冥会』して「方法自心本一体」と覺る
- 四、『遊山慕仙詩』説段ごとの内容と、空海思想の表れ

結論

空海「即身成仏」の世界——その内包する動態的構造

- 一、『自然じねん』と「即身」一体化の構図と、その具体例のまとめ
- 「自然じねん」と「即身」一体化の構図
- 二、『大日即身』の動態的構造
- 「大日即身」の動態的構造図

補論

(補論1) 空海の『声字実相義』における「法身是実相」の構造／(補論2) 空海の「遊山慕仙詩」の思想構造／(補論3) 山岳修行者「播隆」の行動と思想